

## 《巻頭言》

# 北東アジア研究の方法によせて

北東アジア研究には、いまだ的確な方法論が確立されていない。

従来、アジア研究、東アジア研究、東南アジア研究という分野においては、若干の方法論が試みられてきた。それらの方法論は、西欧を基準とする近代化論、これへの対抗原理を中心とする民族解放理論、特定の社会科学の原理あるいは諸科学総合の立場に立つ地域研究、そして近年ではグローバリゼーションの適用論、反グローバリゼーションの各論などである。これらの接近方法は、ある側面では有効性をもつものの、北東アジア研究に適用した場合、かならずしも北東アジアの独自性を明確にすることはできない。そもそも北東アジアという広大な地域においては、EU、ASEAN といったような特定の連帯感は希薄であり、朝鮮半島の「分断」、台湾問題の未解決にも象徴されるように統一国家が“未完成”であり、国際的安全保障機構も未成立である。もしこの地に、欧米を基準とする近代化論や国民国家論、そして欧州安全保障機構のようなシステム論をストレートに適用するならば、いたずらに北東アジアの後進性を強調することになるであろう。

そこでこれまで筆者が提起してきた接近方法は、外来的刺激と内発的反応をセットにして考える相互触発論であり、国家レベルと国際的レベル、および国内的・地域的レベルを並立的に把握する多重構造論であり、異質の文化・社会から共通の歴史的課題（発展と環境保全、自由市場と道義的制御、ヒトの国境を越える移動、人間の安全保障などの課題）に接近する地域的連関のネットワークの形成論であった。

現在北東アジアの地域は刻々と変化しつつある。そしてそこには従来予想されていなかった新しい現象が続発しつつある。それはまことに多様であり、複雑である。もちろんこのような現象は、なにも北東アジア地域だけのことではないであろう。しかし別して北東アジア地域は、異質の民族と文化が厳しい政治的・思想的対立の中にあい合うだけに、いっそう多様性ということが重要な意味をもってくる。またそれだけにミクロな地域分析が決定的に重要となる。

この多様性を大前提とし、歴史的にダイナミックな視点を導入し、それぞれの国または地域の特徴、内発性を北東アジア地域の連関結びつけていくなれば、北東アジア地域研究の新しい方法論が開拓されていくことであろう。

宇野重昭